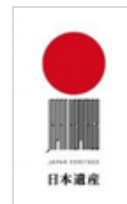




令和元年度

文化庁「日本遺産」認定！



館林市の「里沼」

SATO-NUMA

里沼(SATO-NUMA) — 「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化 —

館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。



13



「守りの沼」～城と躑躅ヶ崎を守ってきた城沼～

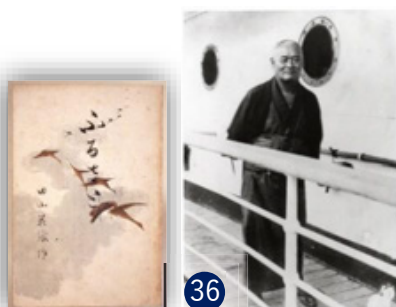
- ❖ 550 年前、周囲 5 km の東西に細長い城沼を天然の要害として館林城が築かれた。城沼は館林城の建つ台地を取り囲む外堀の役目をし、武将たちにとって「守りの沼」となった。沼によって守られた堅固な城は、近世になると江戸を守護する要衝として、徳川四天王の榊原康政や、五代将軍となる徳川綱吉の城となり、守りを固めるための城下町を広げ、その周囲に水を引き入れ、堀と土塁で囲った。
- ❖ 「守りの沼」には、二つの伝説が生まれた。一つは龍神伝説である。沼に人を寄せつけないため、城沼は沼の主・龍神の棲む場となり、城下町にはその伝説を伝える井戸が残る。もう一つはつつじ伝説である。今から 400 年程前、「お辻」という名の女人が龍神に見初められ、城沼に入水した。それを悲しんだ里人は沼が見える高台につつじを植え、その地を「躑躅ヶ崎」と呼んだ。歴代の館林城主はそこにつつじを植え続け、花が咲き誇るようになった高台を築山に、城沼を池に見立てた雄大な回遊式の大名庭園を造り上げた。城主によって守られてきた躑躅ヶ崎は「花山」とも呼ばれ、花の季節には里人たちにも開放された。
- ❖ 明治維新後の近代化は、「守りの沼」を大きく変貌させた。江戸時代に禁漁区となって人を寄せつかなかった城沼は、里人たちに開放されて漁労や墾田、渡船などが営まれ、「里沼」としての歴史を歩み始めた。

城沼周辺の「日本遺産」構成文化財①



②⑤ 城沼の渡し舟は春のつつじシーズンや、7・8月の花ハスシーズンに運航しています。

③① は館林市第二資料館、③⑤ は田山花袋記念文学館で見学することができます。



13 城沼 未指定(名勝地)	館林市中央部にある、周囲約 5 kmの東西に細長い沼。西岸に館林城が築かれ、江戸時代は人を寄せつけない「守りの沼」となっていた。南岸に名勝「躑躅ヶ岡」があり、北岸には「つつじ伝説」を伝える善長寺がある。春はつつじ、夏は花ハス遊覧を楽しむことができ、沼辺を周遊する「文学の小径」や「朝陽の小径」では、四季折々の景観を見ることができる。
16 尾曳稲荷神社 未指定(建造物)	城沼を望む台地上にあり、館林城築城の白狐縄張り伝説に由来する神社。城の鬼門(北東)となる稲荷郭に位置し、館林城の鎮守となった。境内には館林城改修で奉納された手水鉢や、城沼の景観を詠んだ館林出身の文豪田山花袋の歌碑がある。
17 館林城絵馬 館林市重文(絵画)	幕末の館林の浮世絵師北尾重光が、館林城と城沼を描いた極彩色の絵馬。明治 6 年(1873)に尾曳稲荷神社に奉納された。城沼が鮮やかな青色で塗られ、城の建物が沼に浮かぶように描かれ、「守りの沼」を鳥瞰することができる。
18 躑躅ヶ岡(躑躅) 国名勝	城沼南岸にあるつつじの名勝地。城沼に入水した女人「お辻」を偲んでつつじが植えられた伝説があり、歴代の館林城主の保護のもとで、回遊式の大名庭園となった。樹齢 800 年を超えるヤマツツジやキリシマツツジの古木群など約 1 万株のつつじが植えられ、城沼と一体となった景観は、「花山」と呼ばれ親しまれている。
19 善導寺(榊原康政の墓) 群馬県史跡	城沼北東岸にある、近世初代城主榊原康政の菩提寺。榊原康政は、沼に面した館林城をより堅固な城にするため、台地上に城下町を整備し、周囲の低湿地を開発して治水・利水事業を進め、守りを一層固めた。境内には康政をはじめとする榊原家の墓所があり、城と城沼の歴史を物語る。
20 善長寺 (祥室院殿の墓、お辻・松女の墓) 市史跡	城沼北岸にある寺院で、沼の対岸に名勝「躑躅ヶ岡」がある。境内にはつつじを愛でたという榊原忠次の母「祥室院殿の墓」や、「つつじ伝説」を伝える「お辻・松女」の供養墓がある。つつじの季節には、対岸のつつじが岡を結ぶ渡船が運航される。
23 古蹟洗堰 未指定(遺跡)	城沼の水を排水し、水位を調節するための堰。「洗堰」の由来は、中世の武将楠木正成が敗死し、その首を持って逃げてきた家臣たちがこの堰で首を洗ったという伝説による。堰の脇に石碑と楠木神社が建つ。現在、城沼の水はこの堰から鶴生田川・谷田川を経由して渡良瀬川に流れ込む。
25 城沼の渡し舟 未指定(無形民俗)	城沼の渡し舟は、明治時代の館林駅開業によって、駅からつつじが岡へ向かう最短ルートとして行楽客に利用された。昭和初期まで竹生島神社脇に「弁天の渡し」があったが、現在は「尾曳の渡し」と「善長寺の渡し」から運航され、7・8 月には花ハスクルーズの遊覧船が運航される。
27 旧秋元別邸 未指定(建造物)	館林最後の城主秋元氏ゆかりの和風建築物で、明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられた。主屋に広間があり、離れ座敷に茶室と洋館がある。庭園には沼で投網をする秋元氏の銅像があり、つつじや花菖蒲、モミジなどが植えられている。四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。
31 旧上毛モスリン事務所 群馬県重文(建造物)	明治 42 年(1909)に、城沼を望む館林城二の丸跡に建設された毛織物工場の事務所、木造 2 階建ての洋風建造物。近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを生かした工場群となっていた。花の季節には、従業員の慰安でつつじが岡へと繰り出した。
35 田山花袋旧居 群馬県重文(建造物)	江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の武家屋敷で、館林出身の文豪田山花袋が、明治初期の少年期に過ごした。花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛し、小説「ふるさと」にはこの家や城沼の景観が克明に描かれている。
36 田山花袋関連資料 未指定(歴史資料)	城沼を間近に望む田山花袋記念文学館には、代表作『蒲団』『田舎教師』などの初版本のほか、原稿、書簡、日記、愛用品など、田山花袋に関する資料約 1 万点が所蔵されている。展示室には、小説「ふるさと」の自筆原稿と城沼の古写真があり、沼辺を愛した花袋文学の世界へといざなう。

「里沼」

❖【里沼】沼は、古代・万葉の頃には「隠沼」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができる。

TOPIC① 館林市の沼はなぜ残ってきたのか？



「富士見十三州輿地全図」(1842年)

【館林市内に沼が残った理由】

その1 江戸期の河川付替えによる耕地確保

江戸時代の館林地域の新田開発では、河川の付替えによって治水対策を行い、広大な耕地を確保することができた。このため、沼を干拓する必要がなかった。

〔例〕1665年 矢場川流路変更
⇒旧流路(低地)に多くの新田が誕生

その2 それぞれの沼の特色と歴史的背景

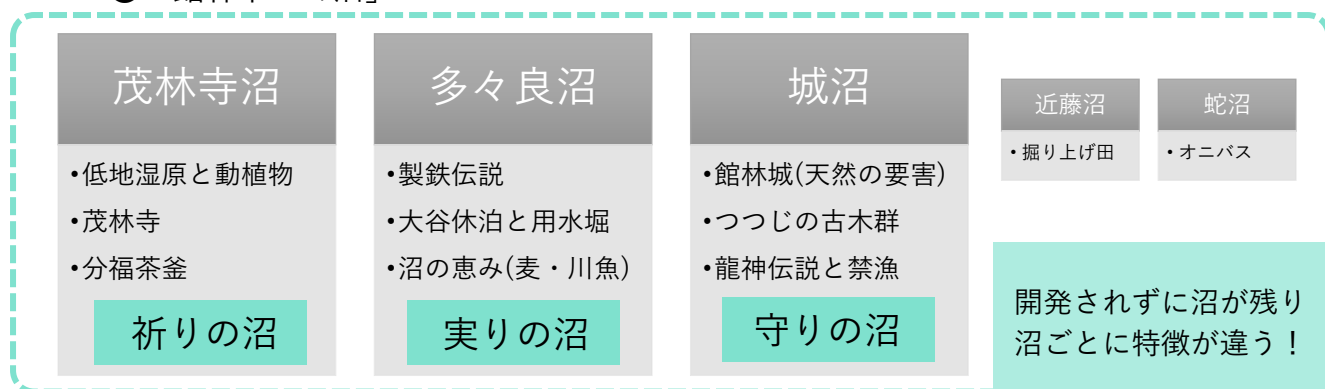
- 茂林寺沼 ⇒信仰拠点である茂林寺領地
- 多々良沼 ⇒周辺村々の水源(生産・生業)
- 城沼 ⇒江戸期：館林城を守る要害(藩領)
近 代：躰躰ヶ岡と一体化した行楽地
文豪・芸術家のモチーフ

江戸中期
新田開発(消滅)

日本各地の平野の沼
〔・江戸期の新田開発
・近代以降の都市化
消滅・縮小で原風景喪失〕

1976-1980年
土地改良(消滅)

TOPIC② 館林市の「沼」



TOPIC③「里沼」の概念

